

令和6年度 信濃教育会全県研究大会 安曇野市立豊科東小学校会場 開催通知

- 1 期日 令和6年11月14日(木)
- 2 会場 安曇野市立豊科東小学校
- 3 共同研究者 信州大学教育学部 講師 楠見 友輔 先生
- 4 日程

13:00	13:20	13:40	14:40	15:20	16:25
(1)受付	(2)開会行事 【視聴覚室】	(3)授業公開 【各会場】	(4)授業者と語る会 【各会場】	(5)講演 【視聴覚室】	(6)閉会行事 【視聴覚室】

- (1) 受付 13:00～13:15 【職員玄関】
※受付後 視聴覚室へ移動
- (2) 開会行事 13:20～13:30 【視聴覚室】
進行 教頭
① 主催者あいさつ 信濃教育会 研究調査部部長 和田 敦
② 学校紹介 本校児童
③ 諸連絡 教頭
- (3) 授業公開 13:40～14:25 【各会場】
1年 算数 『ひきざん』【1年生教室】
2年 生活科 『やぎさんタイム』【校庭等】
3年 算数 『1けたをかけるかけ算の筆算』【3年生教室】
4年 外国語活動 『ほしいものは何かな?』【4年生教室】
5年 算数 『面積』【5年生教室】
6年 総合 『たて穴住居の屋根をふこう』【校庭】
特別支援(知障)
生活単元 『フリーマーケットをやろう』
【スマイル・チャレンジ学級1組教室】
- (4) 授業者と語る会 14:40～15:10 【各会場】
- (5) 講演 15:20～16:25 【視聴覚室】
講師 信州大学教育学部講師 楠見 友輔 先生
「子どもを対話へとひらく授業」
- (6) 閉会行事 16:25～16:30 【視聴覚室】
進行 教頭
① 会場校校長挨拶 学校長 馬淵 勝己
② 諸連絡 教頭

5 その他

- (1) 本要項と資料を印刷してご持参ください。当日資料は受付にて配布します。
- (2) 駐車場は来賓の皆様は本校ロータリー、一般参観者は本校東側駐車場をご利用ください。
- (3) 上履きをご持参ください。2・6年生は校外での学習になりますので、参観を希望される方は暖かい服装等のご準備をお願いいたします。
- (4) 参観後、Google formsでのアンケートにご協力をお願いいたします。

安曇野市立豊科東小学校 駐車場



<松本方面からお越しの場合>

国道19号を明科方面に向かって直進し、「田沢」の信号を左折
30mほど直進してから「豊科東小学校」の看板を目印に右折

<明科方面からお越しの場合>

国道19号を松本方面に向かって直進し、「田沢」の信号を右折
30mほど直進してから「豊科東小学校」の看板を目印に右折

<安曇野 IC 方面からお越しの場合>

県道57号を東に向かって直進

「田沢」の信号手前30mほどにある「豊科東小学校」の看板を目印に左折

(1) 1学年のあゆみ

①『まなびのじかん』

入学して間もない4月中旬から5月初旬にかけて、探求する楽しさを味わって欲しいと願い、全15時間で『まなびのじかん』を行った。『まなびのじかん』では、子ども達が思い思いに自由に活動し、体験することを通して、“なぜ・なに・どうして”と自ら問いを立てること、“あっ、そうか・へえ、そうなんだ・〇〇かもしれない”と答えを見出したり、考えたりすることを大切にして授業を行った。初めは、思いっきり遊びに没頭している子ども達であったが、活動を繰り返すことで、次第に“なぜ・なに・どうして”と感じるようになってきた。活動終了時に、全体で発表する際には、“あっ、そうか・へえ、そうなんだ・〇〇かもしれない”と答えを考え始める児童も増えてきた。

その際に出された“なぜ・なに・どうして”は次の通り。【ジャンボ滑り台について】・右と左で滑る速さが違うのは何故だろう。・あんなに大きくどうやって作ったんだろう。・今日は、いつもより遅かった。暑いからかなあ。・真ん中が速かった。ズボンが緩かったからかなあ。【紙飛行機について】・今日はあんまり飛ばなかった。なんでだろう。・紙飛行機って、なんで飛ぶんだろう。・木に引っ掛かる人がいるけど、私ののは引っ掛からなかったのはなんでだろう。【やぎについて】・やぎさんの目って、なんで横になってるの。→周りがよく見えるようにじゃないかな。・なんでやぎさんって葉っぱ

とかいっぱい食べるんだろう。・なんでチョコ(学校で飼っている3頭のうちの1頭)は、あんまり食べないんだろう。【その他いろいろ】・蛇の巣があった。なんでだろう。→人間に会いたいから小学校の隣に巣を作ったんじゃないかな。・チョークはなんで色がつくんだろう。どっち向きでも書けるし。・なんで風船は空気を入ただけで膨らむのかな。→空気を入れたら、空洞みたいになるからじゃないかな。風船は丸いからだよ。

初めのうちは感じたことを出し合うだけであったが、友だちから生まれた疑問に対して自分の考えを発表する姿も増えてきた。「ああそうかあ」や「本当にそうなのかなあ」という姿も見られるようになった。

②『考えるって楽しい』(個人研究テーマ)

○考えることで、人・もの・ことと対話するであろう。また、学びを深めていくであろう。○子ども達にとっての楽しいとは何かを考えていく。(・分かって楽しい・知れて楽しい・新しいことに出会えて楽しい)○深まった具体的な姿をみとる。と考える、個人研究テーマを『考えるって楽しい』と設定し、子ども達と学習を進めてきた。授業では、ペア学習を意識してお互いに考えや意見を伝え合う時間を多くもつようにしたり、全体で考えを出し合ったりする時間を多く設けるようにした。6月に行った『たし算』の学習では、指を使って数える子どもが殆どであったが、数え方がそれぞれ違っていた。3+4などの片手同士のたしざんの場合には、両手を使ってスムーズにできていた。3+6などの片手を超える場合、苦戦している様子が見られたため、考え方を出し合った。①3を片手で作っておいて、そこから6つ足していく②両手で6を作ってから、3を増やす③3を頭に入れておいて、両手で6を作り、4から数えていく④3を片手で作ってから、反対の手で5を作り、のこりの1を3の方の手に入れるという考えが出され、自分のやりやすい方法でたし算をしていきながら、他の方法も試してみようと学習を進めた。

③公開授業に向けて

公開授業では、算数『ひきざん(2)』の学習で、問題に向き合いながら、自分で真剣に考えたり、友だちと関わりながら答えを導いたりして考えている姿を見ていただきます。『考えるって楽しい』と感じている子どもの姿を共有できると嬉しいです。



(2) 2年生とわたしのあゆみ

大事にしてきたこと

大型動物のやぎを飼うという初めての挑戦で、子どもちと同じ土俵で対象に関われる新鮮さを大事にしたい。子どもの思いを聞きながら活動を広げ、豊かな体験をさせたい。

1年 1学期

特性のある子どもたちが多くて落ち着かない4月を過ごし、やぎ飼育という決意がにぶるが、「あの子たちを教室に閉じ込めて学習させるのは難しいと思うよ。」という校長先生のアドバイスを受け挑戦することにした。1学期は、子どもたちも私も、小屋作り、牧場への引っ越し、草集めなどの作業を新鮮な気持ちでとても一生懸命やった。「やぎさんのために」という合い言葉で行う外での活動は、子どもたちがのびのびとしているのを感じた。しかし、初めてのことなのでなかなか子どもたちの主体的な活動として仕向けることが難しかった。



そのために

- ① 指示ではなく「どうしたいの?」「どんな気持ちでやってるの?」と問いを聞く。
- ② ふりかえりノートを継続していく。

1年 2学期「やぎさんが遊べるアスレチックを作りたい」

トンネル作りをしたH児。雨が降ってもトンネルに入れるようにビニールをはることを思いつき釘でビニール袋をうち、周りのビニールをやぎが食べないようにきれいにしていた。文章で表現をすることが苦手なH児であるが、「トンネルを作りました。ぼくの大好きなチョコがトンネルに入って来て気に入ってくれてうれしくてたまらないです。チョコが大好きです。」と振り返りに記入していた。

2年 出産という再挑戦をむかえての4月 1年生も一緒に飼育をする話し合い

「1年生も一緒にやぎを飼いたいんだけど、飼ってもいいですか。」と1年生がお願いにきた。「絶対いやだ。自分たちが一生懸命作った牧場だから自分たちだけで飼いたい。」と主張するM児。「チョコとミルクのお母さんであるメリーちゃんを飼う予定なんだって。」という提案を再度聞き、友達の考えにじっと耳を傾け「チョコとミルクがお母さんと離ればなれになっちゃったからメリーちゃんに会えたらうれしいと思うし、みんなで飼ったら楽しそう。」と発言した。M児が言う「みんな」には、「やぎも」「1, 2年生みんなも」というどちらの意味もあると推測できる。1年生と当番活動が一緒になると「〇〇くん、一緒にバケツをもってあげるね。」と1年生を手伝う姿があった。

2年 8月 「赤ちゃんが生まれるから小屋の中にふわふわのわらをたくさんひきたいな」

「赤ちゃんが生まれる前にどんな準備をしたいのかな。」「赤ちゃんの部屋を作りたい。」「柵の釘がゆるんでいるところがある。」「牧場にビンなどあぶないものがないか見たい。」「牧場の中に毒草があったら抜きたい。」「子どもたちの発想はとても豊かであった。自分たちの考えで行う活動は、チームごと声を掛け合いながら協力して行っていた。普段の当番活動でも、自主的に赤ちゃん小屋に新しいわらを敷き詰める姿があった。

公開授業に向けて

I児は、普段からマイペースで集団で行動することがとても苦手である。そんなI児が固まった干し草を一本一本きれいにさいてやぎのご飯を用意していた。「どうしてそんなことしているの。」という問いかけに「固いから(やぎの口に)一緒にはいっちゃうんだよ。」と答える。大人目線では、必要ではないのではないかと感じてしまうことがあるが、子どもの行為一つ一つに意味があるんだと感じる。そんな子どもたちの思いを大事にできるようにしたい。やぎの赤ちゃんが生まれ、「だっこをしたい。」という子どもたちの夢が叶い、やぎへの愛着が増している。公開授業では、普段の日常の世話や1年生時から繰り返し楽しんできた散歩をする。思い思いの活動をする子どもたちの素敵さ、おもしろさにたくさん出会いたい。

(3) 3学年と私のあゆみ

①子どもたちとうずらと私の出会い

4月初め、「先生、うずらって知ってる?」「見て、こんなに可愛いんだよ」うずらのことならなんでも知っているというKさんが最初に話しかけてきた。「この子はうめっていうの」「こいつは副船長、一番のお気に入り」仲良しのYさんと笑いながら話していた。うずら1羽ずつを見分け、それぞれ名前も付いている。それまでの子どもたちのうずらとの日々がそこに表れているのではないのかと思う。優しい眼ざしでうずらを見る子どもたちの姿に、これから共に学べることを純粋に楽しみだなと感じていた。

②雛の誕生

4月終わり、孵卵器でうずらの有精卵を育て始めた。「温度は三十六度か三十七度、水も必要なんだよ」「卵をくるくる動かさないといけない」「早く生まれなかな」新たな命の誕生を待ち望んでいる声が多く聞こえた。5月初旬、「殻にひびが入ってきてるね」「卵から鳴いている声が聞こえるよ」「全員で見れるかも!」生まれる瞬間を初めて全員で見ることができると言う。「もうちょっとだよ」「がんばれがんばれ・・・」、両手を合わせて祈るようにして応援していた子どもたち。雛が殻を突き破りながら一生懸命に動き、やっと誕生したその様子に、自然と小さな歓声と拍手がわき上がった。

嬉しかった。本当に嬉しかったし、感動した。けれど、うずらの誕生がここまで時間をかけるものだと知らなかった自分もいた。生まれることがゴールじゃなくて、ここからこの小さな命を生かしていくためにどうすればよいのか必死に考えて、目の前のうずらを見て世話をした。教室から家まで運んだ日々もあった。正直にいうと



大変だった。楽しい気持ちだけではできないと思った。でも、子どもたちが大切にしていうずらだからこそ私も本気で大切にしたいと思った。弱りかけたうずらがいたら助かってほしいと心から願った。私と子どもたちをつないでいるものこそが、うずらの存在だと実感していた。

③うずら小屋作り

「ねえ、最近うずら達の喧嘩が多いよね」「そうなんだよね」「またやられている・・・」、6月になると朝、頭から血を流しているうずらが増えていた。「部屋分けしよう」うずら達を体の大きさや性格で仲間分けした。校長先生にもクラスに入ってもらい、小屋の長さや測定を学びながら小屋づくりを行った。「俺らのうずらは2羽だから、小屋の大きさは他の小屋よりも小さくていいかも」「柱の4本が同じ長さだから木は75cmに切って・・・」「私たちが小屋に入ってみよう」夏休み前日まで続いた小屋づくり。休みまでに間に合うかどうかもどきどきした。毎日図工室で作業しながらどうなるのかと思った。でも、共に作業してくれた先生の存在がいたから頑張れた。並べた小屋を眺めながらAさんが「うずらの村みたいだね」と満足げな表情を浮かべて話すと私たちも笑い合った。また一つ自分たちの好きな場所ができた瞬間だった。うずらと子どもたちと教師同士をつないでくれた。

公開授業に向けて

今回、行う授業は算数です。うずらとの学習ではありません。しかし、これまでうずらとの関わりがあったからこそ対話する場面がたくさんあったのだと私は思います。うずらと関わる際、子どもたちの自然な姿が見られます。わくわくしたり、どきどきしたり、時に考えが分かれて意見がぶつかったりしながらも、子どもたち同士がうずらを通してつながりながら過ごしています。話し合いで、相手に自分の考えを伝えるよさ、相手の考えを聴くよさを子ども達自身が少しずつ実感してきていると考えます。そうした実感を、他教科でも広げていこうにしていきたいです。培ってきた子どもたち同士の対話の場面を、算数でも見ていただけたらと思っています。

(4) 4 学年のあゆみ

「転勤は最大の研修」という言葉を新任校を終える際にいただいた。20数年前のことである。昨年度、長年勤務した大阪を退職し、今年度、長野県の初任者となったこと、また外国語専科から久しぶりの担任になったことで限界突破の毎日である。

【1.悩める総合的な学習の時間】

大阪では総合的な学習の時間を各学年間で系統立て70時間の枠組みの中で行ってきた。それが全く違う。担任がどのような視点を持ち、どのような題材をとり上げて行くか、子ども達とどのように出合わせ、どのタイミングで何を設定していくのか。困難極まりない。何よりも、子ども達の暮らす安曇野・長野県についてほとんど知らない。今年度は、運よく校区にある




“光城山の桜”の出会いと、そこに携わる方々のご縁により、子ども達は問いを広げることからスタートし、桜の歴史・地域の方々の思いや願いを知った。11月には光城山1000人SAKURAプロジェクトの方の協力を得、光城山に桜を植樹することになっている。学校での試験植樹を検討中に思わぬところから挑戦状が叩きつけられ、それもまたどう解決するかを調べ、話し合い乗り越えてきた。光城山での植樹をきっかけに、子ども達にさらにどのような思いが芽生えるか楽しみである。一方で、来年度以降の総合的な学習の時間について考えると恐怖でもある。



【2.GIGA スクール構想下での「個別最適な学び」・「協働的な学び」をどうする?】

主体的・対話的で深い学びをめざすには、まず、子ども達自身が「学び方を学ぶ」ことが欠かせない。そのため、大まかではあるが以下のように取り組んできた。

	担任	子ども達	成果と課題
一学期	Microsoft, Sky Menu から Google, ロイロノートへの操作慣れと機能確認。授業の中での活用法の検討。	端末を「文房具」として使えるようにする。キーボード入力、スプレッドシートやスライド上での協働編集などに慣れる。	Ss: キーボード入力が覚束なかったり、協働編集に慣れずスプレッドシートが崩れたりと混乱状態をくり返し、操作に慣れてきた。操作上のうまくいかないことへの耐性もでき、ある程度のことは友達同士で解決できるようになった。T: ロイロノートや実物提示機以外はほぼ使用できるようになった。
二学期	授業内の学習システムの構築を試行。 (Classroom を活用しての学習、スプレッドシート・ロイロノート等の連携、ルーブリックの設定等)	Classroom で示された課題を各自が確認し、自分で学習を進めていく。必要に応じて協働しながら学習を行う。 	Ss: 45 分の時間内にどのような時間調整をすれば良いかなど、見通しを持って自分で学習を進める場面が見られるようになってきている。さらに、キーボード入力でまとめたり、ノートにまとめたものを写真で撮って提出したり、どこで何を使うとスムーズなかも考えられるようになってきている。協働的な学びを誰と行うかの選択の仕方に課題がある。T: 協働的な学習の場の設定の多様性が必要。ルーブリックの設定とその在り方、ルーブリックと評価との関係性についてさらに学び整理していくことが必要。

【3.今回の授業について】

今年度、日本語ベースの教科の「個別最適な学び」・「協働的な学び」について取り組んでいる。気になり始めたのが外国語学習入門期における「個別最適な学び」・「協働的な学び」とは?ということである。現段階では、青写真さえできていない状態である。どのようなことが授業の中で設定できるのか、ここから少しずつ探っていきたいと考えている。

(5) 5 学年のあゆみ 長澤 諒

令和4年度5年生を担当した際、教育課程「理科」の授業者となりました。これまでの様子から「実験に意欲的で記録もたくさんとれるのに、考察はあまり書けない」「発言をしても発表にとどまりがち」等の反省が出てきました。何を調べるための実験・観察なのかつかめておらず、主体的に行われていないのではないかと考え、①思わず考えたくなる問いの設定②根拠のある仮説をもつことのできる場(時間)の確保③仮説を実証するための実験方法を子どもたち自身で検討し実践することを大切にしました。



令和4年9月2日(金) 理科「もののとけ方」

食塩やミョウバンを水にたくさん溶かすための予想と根拠、実験計画を考える場面

【水の量を増やす】【温める】が出てくる中、【お湯を足す】と考えた A 児は「温めるのと足すのとダブルの効果で溶けると思う」と机間指導をしている私に話しました。「その実験計画では【水が増えたから溶けたのか】【水が温められたから溶けたのか】どちらなのか証明しにくいのでは」と私が声をかけると、あまり納得がいかずお湯を入れたい様子でした。その表情を見て隣の B 児が寄り添い、「んー、じゃあ水を足すのと温めるのを分けて2つやるのはどう?」と声をかけると A 児は「ぼくのは違うからいいや」と返しました。するとすぐに班の仲間たちが「A 児の考えもすごいと思うから A 児のやつを温めるにしてやろうよ、だから2個実験しよ」と声をかけていました。

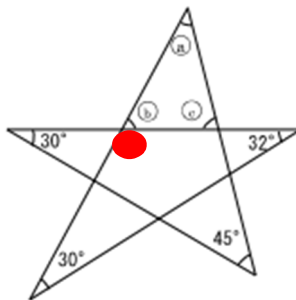
⇒授業者としてそのときは気づきませんでしたでしたが授業後に動画を見ると、子どもたちがこんなにも温かい目や声がかけて関わり、A 児の思いを大切にしながらも条件制御を意識して実験計画を立てる姿に感動しました。このとき、「子どもって俺が思っているよりもっともっとすげえ」と感じ、「子どもたちに実験計画なんて考えさせたらとんでもない方向に進んでしまうかもしれない」と考えていた自分が恥ずかしくなりました。今までの一斉指導から脱却をして子どもたちに学びを委ねようと思案した場面でした。

今年度も5年生の担任となりました。子どもに学びを委ねることを意識することで教師が話している時間が少なくなり、その代わりに机間指導の時間が多くなりました。すると、子どもの小さな呟きをキャッチする余裕が生まれ、班の友だちにつないだり、全体の場でその子の困りを共有できたりするようになってきました。また、子どものことを考えたり、子どもの学びをふりかえったりすることが楽しくなってきました。

令和6年9月3日(火)

算数「合同な図形」

三角形の内角の和のきまりを適用して様々な問題を解く場面



思ったこと・言いたいことをすぐに口にしてしまう C 児ですが、10分もの間黙って問題に向き合い、紙を回転させ図形の向きを変えたり、鉛筆でなぞる仕草をしたり、補助線を引いたり眉間にしわを寄せて考えていました。しかし、自分の考えがうまくいかずに悩んでいた終盤に、別の班の子が●の角度に注目したことを担任が取り上げると、気にしながらも、自力で解きたいため片耳を塞いでいました。時間が経つと糸口が見つけられず、全体の学びが停滞したため、私が注目する三角形を電子黒板に色づけしようとする時「先生!それ答えを書くわけではないよね!!」と発しました。なんとしても自力で解決したい気持ちが伝わってきました。とはいってもの気になるらしく、私が色づけをするのをチラチラ確認すると「ほらね!やっぱりね!」と呟き、それからものすごいスピードで一気に3つの角度を求めることができました。それまで別の形に注目していたことから「やっぱりね」の後には「俺のやり方は違ったんだ」が続いたと思います。

⇒普段「もう授業終わる?」「給食早く食べたいな」なんて呟く C 児が、違っていたことでやる気をなくすのではなく粘り強く取り組み、よい表情をしたのは、やり応えのある課題と十分に対話したことで自分の間違いを素直に受け入れることができたからだと思います。当日は、算数の課題を通しての教材・自分・友・教師との対話を楽しんでいる子どもの姿を見ていただき、語る会で具体的な姿から一緒に学びたいと思います。

(6) 6 学年児童と私のあゆみ

<4 月 今年度の総合的な学習の時間で何をしようか？>

子どもたちと、「総合的な学習の時間にどんなことをしてみたいか」について考えました。さまざまな意見が出された中に、「竪穴住居を作ってみよう」という意見がありました。社会科の歴史の学習で縄文時代について勉強したこともあり、多くの子どもたちが「やってみよう」「みんなでものづくりをしてみよう」という思いをもっていました。正直、私は「めんどろだな」「材料はどうするんだよ」ということが心に浮かび、あまりやりたくありませんでした。そのことを職員室で話していると、校長先生から竪穴住居作りを指導してくれそうな人がいることを教えていただきました。

今まで自分が行ってきた総合的な学習をふり返って、「子どもたちが主体的に取り組める活動が、本当にできていたのだろうか」と考えました。子どもたちが「やりたい」と思う活動を私も本気で一緒にやれば、「子どもたちが主体的に取り組める活動になる」「友やささまざまな人、もの等と深く関わりながら学習できる活動になる」と考え、思い切って教えていただいた「小谷屋根」の松澤さんに電話連絡をしてみることにしました。松澤さんは、「子どもたちのためなら、喜んで協力させてください」と快く引き受けてくださいました。しかし私の中には、やりたくないなという気持ちがまだ残っていました。その気持ちを振り払ってくれたのは、松澤さんにお会いしてお話した時の「先生、やりましょう。すごくたくさんの良い経験、学びができますから」という言葉でした。「よし、やってやろう」という気持ちになりました。

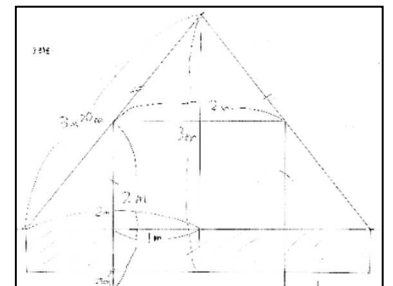
<5 月 材料はどうするの？ 場所はどこの？>

第一関門は、材料の調達でした。子どもたちに「材料がないと、何も進まないぞ」という話をしました。すると、「先生、うちに使える木が何本かありそうだよ」「祖父母の家から、いらない木材をもらえそうだよ」と、次々に話がきました。家の人に話をして、本気になって、材料探しをしてくれた子がいたのです。その話の中に、近くの農家の方がいらなくなったはず樫をたくさんくださるという話があり、材料の調達をすることができました。

次は、建てる場所です。校長先生に、校庭の北側の端に竪穴住居を建てる許可をもらうことになりました。そのとき、H 児に「先生、黙って。僕たちが話すから」と言われました。その子は、本当に建ててみたいんだという気持ちと、どうしてこの活動をしたいのかという理由を、自分の言葉で校長先生に伝えました。校長先生から「途中困難なことがあっても諦めないこと」「みんなの力を合わせてやること」を条件に許可をしていただき、いよいよ活動を始めることにしました。

<5 月～6 月 設計図づくり 穴掘り 縛り方を教わる>

竪穴住居の大きさは、底面の半径 2m の円の大きさにしました。この大きさは「立ってでもいいから、クラス 28 人みんなで一緒に入りたい」という子どもたちの願いから決まりました。高さは教室の天井くらいに 3m にしました。これをもとにして、必要な材料の長さを知るために、設計図を描きました。設計図を描くときには、「ちょっと算数の勉強を先取りするぞ」と言って、学習前ではありましたが、今年算数で学習する予定の「図形の拡大と縮小」を使って描きました。



設計図をもとに、穴掘りをしました。やってみるとなかなか大変で「先生、縄文人の人って、どうやって掘っていたんだろう。スコップを使ってもすごく大変なのに。スコップはなかったよね」と縄文人のすごさ・苦勞を体感しました。道具のありがたみも感じました。作業をしていくと、「私がこっちの土をそっちにわたすから、外に出してくれる？」「ここの土を僕が軟らかくするから、この土をどかしてくれる？」など、自然に対話をして、そして協力して、作業の流れができていきました。穴を掘るには、先が一直線のスコップではなく、先が丸いスコップの方が掘りやすいことに気づいたり、足を使ってスコップを蹴って使う方がしっかり掘れることが分かりました。穴掘りは、大人はつまらないと思うかもしれませんが、子どもたちに言わせると楽しく、良いストレスの解消になったそうです。



骨組みを組んでいくにあたり、どうやって縄で縛っていけば良いのかが分かりませんでした。そこで、小谷屋根の松澤さんにお越しいただき、縛り方を教わることになりました。松澤さんから、子どもたちでも木材同士をギュッと縛れる方法を教えていただき、試しに木を屋根のような形に組んでみました。縛り方が分からなくなってしまった子が、「この後どうすればいいんだっけ」と自然に友だちと関わる姿が見られました。松澤さんに「組んだ木材にのってみていいよ」と言われ、子どもたちは足をかけのぼりました。自分たちが縛って組んだ木材の頑丈さに感動し、みんなでのぼって写真



を撮りました。松澤さんのおかげで、子どもたちも私も、「木材をしっかりと組みそうだな」と自信をもつことができました。

<7月 垂木を支える立方体を組む 骨組みを組む 思いがけない出会い>

垂木を支えるために、立方体の形に木を組み、立てることになりました。設計図をもとに、支柱を埋める部分だけ、さらに掘り下げました。そのときに、「粘土のような層が出てきたね」「地層みたい」という発見がありました。校庭は、地層になっていて、粘土の層があったのです。



立方体を組み終わると、いよいよ骨組みを組んでいきました。「こっちをおさえて」「ここは長いから木を切って」「次どこを縛れば良いの?」と、自然と子どもたちの声が飛び交います。この活動は一人だけの力で成し遂げることは困難ですが、みんなが考え、力を合わせることでできるのだと改めて感じさせられました。

ある日、教頭先生に「小松先生ちょっと」と呼ばれ、校長室に入っていました。そこにいたのは、別の活動の打ち合わせに来ていたアーティストの布下さんでした。布下さんから、「竪穴住居を作っていると聞きました。昔の人のように野焼きで像を造りませんか?」という話をいただきました。しかも、「掘った時に見つけた校庭の粘土を使って作ってみよう」というお話でした。私は嬉しくなって、やりたいという返事をして、子どもたちにも話をしました。子どもたちも「やってみたい」という返事で、竪穴住居作り番外編パート①「野焼きで作品作り」を行うことになりました。竪穴住居作りをしていなかったら、この出会いはなかったと思います。

<9月 骨組み完成 野焼きで作品作り>

5月からコツコツと作り上げてきた骨組みが完成しました。どんどん形になっていくのが、子どもたちも私もとても楽しかったです。「完成」となり、離れて眺めてみたり、写真を撮ってみたりした時には、充実感がありました。骨組みを作っている途中、K児が「私、縄を縛る練習をしたいけど、ロープを少しもらっていてもいい?」「もっとギュッとしっかり縛れるようになりたい」と言ってきました。「いいよ」というと、嬉しそうにロープを切って持ち帰っていきました。K児は、クラスで一番縛るのが上手になり、「すごくこの活動楽しい!」と話していました。主体的に活動に取り組む中で、意欲や自信をさらに高めていたように感じました。



校庭を掘り、作品作りに使用する粘土を掘り出しました。布下さんと一緒に、その土から粘土を精製する作業をしました。不純物を取り除いていくと、なめらかになっていき、感触が心地よかったです。出来上がった粘土を使っての作品づくりは親子で行うことにしました。互いに大切な人を想って像を造ることにしました。きっと昔の人も、大切な人を想ったり、幸福を願ったりして、焼き物を作ったのでしょう。



乾燥した作品を野焼きしました。野焼きの前日、夏休みの自由研究で「まいぎり式火起こし器」で火起こしをしたM児が、「先生、火起こし器持ってきてもいい?」と話してきました。「いいよ、持っておいで」と言うと、次の日にお父さんと作った火起こし器を持ってきました。M児は、野焼きの火を、火起こし器でつけたかったのです。布下さんにも「よし、やってみよう」と言われ、自分の火起こし器を使って火を起こし始めました。周りの子も興味津々。本当に火がつくのかな。火種を作ることに成功したのですが、点火するところまではできませんでした。野焼きの最中も、たくさんの子たちが集まって、火起こしを試みていました。「二人で火起こし器を押した方がいいよ。煙が早く出る」「先端を少し削った方がいいよ」など、話しながら試していました。「これは、竪穴住居作り番外編パート②をしなくちゃな」と思いました。朝から始まった野焼きも、昼過ぎには焼き上がりました。焼いた作品を見ると、少し欠けてしまった物もありましたが、それも含めてとても素敵な作品になりました。黒っぽかった学校の土が、焼くと白いきれいな色になることにも驚きました。骨組みの完成した竪穴住居の前に並べると、とてもいい雰囲気でした。「集めて並べると、村人みたいだね」なんて声も聞こえてきました。子どもたちの方が、発想や感受性が豊かです。



<10月 火起こし>

火起こしに何度もトライしていた子どもたち。「火起こしやってみたい?」と尋ねると、「やってみたい」という多くの返事。これも、この活動をしてこなかったらできなかったことだと思い、「それなら、やってみよう」ということにしました。竪穴住居作り番外編パート②「火起こしをしよう」です。M 児の作ってきた火起こし器を見たり、インターネットで調べたりして、火起こし器を作って、それを使って火起こしをやってみようと考えました。

まいぎり式火起こし器を班ごとに作り、さあいよいよ火起こし。前日に、家で試作をして練習をした私。「絶対に子どもたちより先に火をつけてやる」と思っていました。しかし、「ついた!」という声。それは、夏休みに火起こし器を作った M 児でした。M 児に先を越されてしまったのです。やはり、意欲をもって取り組んできた子は違います。それを見た周りの子どもたちは、俄然やる気に。直接関わるわけでもなく、お互いに刺激し合っ、影響をし合っています。各班を回って様子を見てみると、「先端の部分が板の穴から外れないように注意して」「もっと早く回せるようにしよう」「火をつける麻綿を準備しておかなくちゃだめだ」など、子どもたち同士が話をして、考え、工夫をしている姿が見られました。火のつけ方を詳しく教えようかなと思っていた私でしたが、子どもたちにまかせることにしました。みんなであれこれ試行錯誤している時間が、子どもたちにとって楽しいようでした。子どもたちが対話をして、自分たちで活動の方向を決めることができる場、子どもたちにまかせるということが子どもたちの学びにおいてとても重要なものであると感じました。主体的に夢中になって活動に取り組んでいるからこそ、友や材との対話が自然と生まれ、深い学びにつながっているのだと子どもたちの姿から分かりました。

その日の給食の時間に S 児が「先生、昔の人は火を起こすのが大変だったろうな。僕たちだってあんなに大変だったんだから。道具を作る時の工具だってないんだよ」と言ってきました。「そうだよな。火は昔の人にとってとても貴重なものだったろうな。火起こしがうまい人はヒーローだったんじゃないかな。あの村の〇〇さんは、火起こしがうまいらしいぞなんて、有名になったりしてたかもな」と、私も一緒になって会話が弾みました。活動している間に、子どもたちはこちらが思ってもみなかったことを考えています。S 児の言葉は、一生懸命にやってみたからこそ出てきた言葉なんだろうなと思いました。

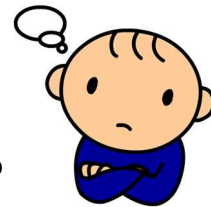
<公開授業に向けて>

公開授業では、竪穴住居の最終段階「屋根葺き」を行う予定です。子どもたちが一生懸命取り組んできた活動の中で、子どもたちが友や材とどのように関わりながら活動をしているのか、子どもたちがどんな学びをしているのか、子どもたちの姿を一緒に見て、教えてください。

(7)スマチャレ1組【授業学級】のあゆみ

特別支援学級での対話ってどうしたらいいの？

本校のテーマである【対話を通して、学びを深めていく・・・】の文面を眺める度に、特別支援学級での対話とは？と立ち止まってしまう。学年も実態も様々な学級の子もたちはどうしたら、対話をしてくれるのかな？



そんなことを考えながら、1学期は庭先で『どろんこランド』という生活単元学習をおこなった。泥遊び、水遊びが大好きな子どもたちである。回数を重ねれば自然に対話も増えていくだろうと考えていた。しかし、活動の場が花壇で横長だったり個人で遊び場を仕切りたいという思いが強かったりして、子ども同士が積極的に関わり他者と対話をしながら活動することは少なかったように感じ、共通の願いや思いを明確にせず、



子ども同士のコミュニケーションを促してこなかったことを反省した。共通の願いはどのように持たせるのか？あらゆる学びは『対象・他者・自己』との対話によって新しい世界と出会うのだと言う。(佐藤学氏「学校改革する」P25より) 他者との関わりを持ち対話できる状況を作るには、一体どうすればよいのか？



2学期になり、お楽しみ会でデザートを作った。その際に「お金がないからもう作れないかも」と伝えると、子どもたちの方から「みんなで何か作ってそれを売ってお金を稼ごう」という提案がなされた。子どもたちの願いが大きく、製品を製作し保護者に販売することにした。今回の授業では、製品の製作から販売、たくさんのお客さんに来てもらうための宣伝など、子どもたちが関わりながら活動できる場面が予想される。『たくさんのお客さんに来てもらいたい』という子どもたちの願いが共有され友だちと関わっていくことで、自らの考えを確認し見返し、そこに様々な【他者との対話】が生まれて欲しいと願っている。



(8)スマチャレ2組のあゆみ

学習内容は基本的に、どの子どもたちも該当学年の教科書の内容で進め、子どもの実態に合わせて、教師対子どもの個別学習(1対1)が主になってしまう。自情障学級で「異学年や同学年の子どもたちの関わりを大切にしていきたい!」その中に「対話的な深い学び」が生まれてくるのではないかと考え実践してきました。

①「スマチャレ言葉」で言語スキルを高める!

学校での「朝のあいさつ」は相手意識や場面意識を身につけるのによいチャンスです。4月、スマチャレ学級に入級すると「おはようございます」「失礼します」「失礼しました」「できました」「わかりません」「教えてください」「〇〇を貸してください」「ありがとうございます」を言う練習をします。新しく入級した2人の1年生もスマチャレ言葉を練習して使う事で、学校生活にも慣れ、コミュニケーション力が高まりました。日常的な発言訓練や表現スキルを鍛える事が対話的な学びの第一歩になりました。

② 交流の隊形を変えることで段階的に対話を広げる

子ども対教師から 同学年同士、異学年同士(1対1・1対2・スマチャレ2組全員)と段階的に交流の隊形を変えることで対話を広げてきました。クラスにも慣れ、お互いの様子が分かるようになると、話をする時間を楽しむようになりました。音読を交代で行ったり、プリントのマル付けをしあったり、九九を聞きあったり、算数の問題を出し合ったりしました。2学期になると「わかりません」「教えてください」と1年生が言うと、2年生のHくんがそばに寄り添って教えてくれる姿も見られるようになりました。Hくんは1学期、いつもイライラして、怒ると物を投げたり、暴言を言ったり、学習にも気持ちが向かないお子さんでした。始めは答えを教えてしまっていたHくんですが、今では「おいしい!」「あっ違うね」「〇〇だから、オッケー!」「いいね」と1年生と関わることで、本来持っている優しい姿を見せてくれるようになりました。対話を学習に取り入れることで、考えが変わったり、新たな気づきを得たりして、世界を広げていってほしいと思います。



(9) スマチャレ3組【授業学級】のあゆみ

「対話を通して、学び合いを…ペア学習を通して学び合い？」

特別支援学級で、研究テーマである「対話を通して…」に結びつくことはどんなことか？普段行っている授業を振り返ってみました。すると、友だちとの関わりの中でいろいろな発想が生まれお互いを意識して学習することができるペア学習で対話を考えていけるのではと思いました。

スマチャレ3組では、以下の3つのことを大事にしながら取り組んでいます。

①メニュー表を見てその授業の見通しを持つ。

②教室に入る時には「失礼します」「失礼しました」その他「ありがとう」学習が終わったら「できました」「おわりました」等のあいさつをして、わからない時は「わかりません」をスマチャレの言葉として大切にしています。

③ペアで学習して、音読を聞き、段落や一文をお互いに読み合っています。そうすることで、学習が定着し、教師が指示しなくても、自分からメニュー表に書いてある内容を見て学習する姿が多くなりました。読むことに抵抗のある子も小さい声で、毎回のパターンとして、無理なく自然な形で取り組んでいます。

デジタル機器を使うことも、学び合いにかかせません。漢字の書き順を覚えて書くでは、実際に練習する機能がついているので、それに沿ってお互いに確認しながらできます。

答えが隠れている漢字を予想し、考えてから答えを見て確認をしています。

便利なツールも、ペア学習が進んでできる一つになっています。学習が終わった後は、友だちと短時間ジェンガやブロック、魚釣り遊び等を楽しみながら話をし、好きな活動をするのも、コミュニケーションを取り、学び合いの時間になっています。



(10) スマチャレ4組のあゆみ

全校の研究テーマ「対話を通して学びを深めていく子どもたちをめざして」を受け、自閉症・情緒障がい学級であるスマチャレ4組では、集団生活や自己表出に困難さを抱える子ども達が、安心できる人的・物的な環境の中での友だちとのかわりや教師の仲介などを通して、生き生きと活動し、豊かに生活する姿を思い描いて学習に取り組んできた。

ペア学習の導入

S 児は、切り替えが難しく、算数の個別学習では取りかかりに時間がかかっていた。しかし、原級から取り出し通級の T 児とペア学習に取り組んだところ、毎日、時間になると、得意な情報機器の学習準備をして T 児を待つようになったことは驚きであった。「上底と下底を足してどうするんだっけ。」「つまり、平行四辺形を作ったのか。」「あ！そうか、だから後で÷2をするんだね。」などと、2 人にとって課題となる箇所があると、会話をしながら学習する姿が見られる。話好きだが、集団のペースに合わせることや失敗を受け入れることに困難さがある S 児には、安心できる人数、相手、決まった場所、基本的に同じ学習の流れなどの環境が整えられることで、友だちと課題を共有する楽しさを感じ、より主体的に学習する姿が生まれるようになったと考えられる。

SST すごろく

N 児は、人にどう見られているかが過度に気になり、人前に出ること、集団に入ることが困難で、自分の考えを表出することに課題がある。しかし、毎日同じ教室で過ごしている支援級の友だちや教師と共に、SST すごろくに組み込むと、設定された場面や状況に応じた対応について、自分なりの考えを発表する姿が見られる。「外国から友だちが来ました。休み時間にどんな遊びに誘う？」という設問には、普段だと、首をかしげたり、ジェスチャーで分からないというポーズをとったりすることが多いが、すごろくでは「日本の伝統的な遊びかな」と答えた。また、答えに詰まる設問には、教師が選択肢を挙げることで、その中から一つを選んで答えることができています。N 児には、安心できる相手や人数のグループで、遊びやエンカウンター的な要素の中で自然発生的に自己表出の経験を積み重ねることが、自己肯定感を高めることにつながりそうだ。